

イザドラ・ダンカン(1877-1927)の舞踊芸術の確立 —20世紀初頭フランスにおける芸術家たちとの交流から

柳下恵美(早稲田大学)

イザドラ・ダンカン(Isadora Duncan, 1877-1927)は、20世紀初頭に独自の新しい舞踊を確立し、世界各地で舞踊公演を行うことで多くの人々を魅了し称賛された。現在、彼女がモダンダンスの創始者として歴史上に名を残しているのは、当時娯楽と見做されていた舞踊を自身の舞踊思想の基に確立し、それを芸術の領域に高めることに成功したからであろう。彼女は舞踊界のみならず、芸術界にも革命を起こしたのである。しかしながら、この芸術革命の成功には彼女のたゆまない舞踊研究はもとより彼女の芸術思想に共感する芸術家の支援と賛美があったからであると考えられる。

母国アメリカで幼少期から種々様々な身体訓練を受け、パントマイムや演劇、バレエを学んだイザドラは、主に富裕層の邸宅で私的な公演を行っていたが、当時のアメリカでは彼女の舞踊は芸術として見做されることはなかった。1899年、新天地をイギリスとしたイザドラは大英博物館や美術館に頻繁に通い、絵画・彫刻から舞踊の動きを研究し、多くの舞踊に関する書物を読破している。富裕層のサロンで私的な公演を行い、美術館内で絵画や彫刻そして音楽を身体で表現するなど新たな試みにも挑戦するが、これはまだ自身の舞踊の形成の始まりであった。独自の舞踊の確立は、兄レイモンドに誘われ1900年から移住したフランス滞在時になされた。当時パリは万国博覧会の開催中で、草履を脱いで自由に踊る川上貞奴(Sada Yacco Kawakami, 1871-1946)の姿と象徴的で理想の生命を表現しているオーギュスト・ロダン(Auguste Rodin, 1840-1917)の彫刻作品に感銘を受ける。このような素養が土台となり芸術家を支援していた富裕層のサロンではイザドラの踊りを高く評価するが、彼女の踊りが真の意味で芸術と見做されるようになるのは、一流の芸術家である彫刻家ロダン、アントワーヌ・ブールデル(Antoine Bourdelle, 1861-1929)、画家ウジェーヌ・カリエール(Eugène Carrière, 1849-1906)などによって芸術として評価されたことによる。実際、彼らはイザドラをモデルにした数多くの芸術作品を作成し、彼女の踊りについての証言も残している。しかしながら、詳細に記述されているとされるフレドリカ・ブレア、リリアン・ローウェンサル、ピーター・カースなどの先行研究においても、フランス滞在時のイザドラの舞踊の確立と芸術家たちとの交流について、一次史料を用いての検証と詳細な研究はなされていない。

そこで本発表では、イザドラの20世紀初頭のフランス滞在時に焦点をあて、彼女の舞踊芸術の確立において最も重要な要素となった美術館・博物館、図書館での研究、1900年パリ万国博覧会、富裕層のサロンでの公演、一流の芸術家との交流について明らかにすると同時に、一次史料であるイザドラの自伝、末裔所蔵のイザドラの兄レイモンド・ダンカンの未刊行の覚書、当時の写真、手紙、公演プログラムなどを検証し、これまで未詳であったイザドラの舞踊の確立と芸術として認められるまでの過程を明確にする。